

地域主義とトランスナショナルリズムの交錯するところ ——バルセロナ市における移民包摂政策の諸戦略とその問題点——

小井土彰宏 (一橋大学)

地域主義の運動と移民のトランスナショナルな諸実践、この二つは国民国家を自明視する旧来の社会認識を対照的な方向から揺るがす現象として、過去 20 年以上にわたって認識されてきた。だが、この両者は国際社会学の中でもしばしば別領域の事象として扱われ、相互の関係は積極的に検討されてこなかった。しかし、トランスナショナル視角の登場以前、定住化論的な視点から国際移民研究の諸成果は、移民現象がローカル社会の文脈で検討されなければならないことを指摘してきた。そして、越境的に展開するトランスナショナルな移民の活動は国民国家の境界メカニズムや諸制度に規定すると同時に揺るがしきたが、同時に地域社会文脈との相互作用の中でのみ初めて理解可能であることは、日本を含む様々な実証研究でも議論されてきた。とするならば、強い地域的な意識、社会組織、自治的行政構造をもつ地域主義の活発な社会では、特にトランスナショナルな諸過程とリージョナルな論理がどのような相互作用をするのかを分析するのは重要な研究課題であろう。本報告は、世界的にも強い地域的なナショナリズムでよく知られているスペイン、カタルーニャ自治州のバルセロナ市に焦点を当てる。それはこの分離独立主義の中心都市が、同時に現在人口の 16% を占めるきわめて高い比率の移民を内包し、それが独自の地域ナショナリズム強く相互に規定しあっているからである。

本報告では、2013 年春（予備調査）と 2015 年夏（本調査）に実施した現地における自治体幹部、自治体の現場職員、移民団体の代表及び活動家、移民支援の NPO や財団、を対象とした聴き取りに主に基づき、カタルーニャ自治政府とバルセロナ市が移民たちに対して行っている積極的な移民「統合」政策を下記の諸点を中心に分析し検討していく：1) 多様な移民受け入れ政策の独自戦略の特徴とその有効性；2) 意思決定と参加のローカルな社会構造；3) 移民受け入れをめぐるナショナリズムの歴史的構造と作用；4) カタルーニャ語を中心としたナショナルな統合路線をめぐる中央政府及び移民との二重の緊張関係。

本報告を通して、第 1 に、現代の地域主義が限定的な空間とそこに根付く土着的な本質主義化されたアイデンティティを基盤にするといったステレオタイプを大きく超え、越境活動がもたらす多様な文化を積極的に受け入れつつそれを統合するという点を示し、地域主義のスケールの変容と越境的フローとの接合の構造を解き明かしたい。第 2 に、これらの政策を主導する“通文化主義” *interculturalism* という概念を実施の実態の中で検討し、その理念的・方法的な先進性を認めたい。現実の地域ナショナリズムの下での実践が併せ持つ権力的な作用についても議論したい。

なお、報告の際には一部当事者の発言の映像資料も活用する予定である。